

# 俺の異世界転生記！

紅露雨

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「あらすじ！ 目が覚めたら死んだってことに気づいてなんやかんやで転生してなんやかんやでなんやかんやー！」

「シンラ様、なんやかんやしか仰つてませんよ？」

「要約すると、転生したんでもう一回人生やり直しますつてことだ」「ぞっくりですねえ……」

……  
……  
……

## ※注意※

一応（↑ここ重要）俺の異世界転生記のリクリエイト作品です。

あれを読んだ人はいないと思いますが、一応（↑超重要）あれ準拠で書いていくのでネタバレかも。

R15タグと残酷な描写タグは基準がわからないのでつけてるだけですが。

幼稚な駄文ですが見ていただけると幸いです。

誤字脱字と思われる箇所等があればご指摘いただけるとありがたいです。

一応、確認は何度もしていますが、それでも間違えている箇所があつたりするので……不躰なお願いですがよろしくお願いします。

感想とかいただけると作者は泣いて喜びます！

# 目次

|                  |    |
|------------------|----|
| 零世——転生におけるテンプレ空間 | 1  |
| 壹世——いきなり十歳とはいかに  | 7  |
| 貳世——光に拾われた闇の子    | 17 |

## 零世——転生におけるテンプレ空間

……ここは？

気が付くと見知らぬ場所に居た。

夢かとい蹴する事は簡単だが、全身に襲い掛かる違和感が夢ではないと感じさせる。

違和感の内容は言葉で説明しようがない、強いて言うなら直感だ。

ここはとにかく〃白〃だった。

上下左右は勿論のこと、振り返っても白。視界に入る全ての情報が白そのもの。

この〃白〃は俺が俺でなくなる、俺という存在を呑み込んでしまおう、そんな違和感を感じさせる〃白〃だった。

少し離れた所に白い靄がかかる。この白だけは何故か〃白〃しかないここで色として認識できた。

……俺がいる時点で白以外の色があるはずなのだが、どういう訳か俺には体がない。

普通に考えたら夢なのだろう。

だが、強烈な違和感が夢ではないと言っている。

夢でなければここはどこなのだろうか。なぜ、俺はここにいるのか。

そもそも体がないのにこうして考えていられることも不思議だ。

考えれば考えるだけ、理解<sup>わか</sup>らなくなる。

だが、何か考えていなければ俺もやがては〃白〃になる。

根拠はない。しかし、〃白〃しかない空間は俺を確実に恐怖へと誘うのだ。

「おや、気がついたかい？」

遠くに居た白色が俺の存在に気づいたのか、こちらへと近付いてきた。

白色がヒト型になり髪の毛が、顔が、服が、描き足される。それに色が足され、十代後半くらいの若い女性になり、こちらへと話しかけ

てきた。

だが、返答しようにも身体がない。つまり声が出したくても出ない。

「大丈夫、君は〃そこに居る〃」

「女か。確かに俺はここに居るが。ここに……〃居る〃？」

その女性が俺の存在を認め、許した。

それを合図に俺の身体も彩られ、会話することができるようになった。

「やあ、久しぶりだね。それとも、初めましてかな？」

本当に久しぶりに知人に会ったかのような雰囲気。

だが、俺にはこの女性に見覚えもなければ、この場所に心当たりもない。

「俺はあんたを知らないから、初めましてじゃないのか？」

心当たりは無いが、もしも彼女が知人だったら失礼なので記憶をたどってみることにした。

やはり記憶には彼女は居なかったが、だったら彼女は一体何者なのか。そして、ここはいつたいなんなのか。

「いや、久しぶりとか初めましてとかはどうでもいい。ここはどこで、あんたは誰なんだ」

「僕かい？ 僕は君達という地主になるのかな？ 単位は世界だけだね」

無い胸をはる自称世界の地主。

何故、貧乳をチョイスしたのか、俺の知り及ぶところではないが……なるほど。

世界の持ち主、それはつまり。

「神か。それなら、ここは神の間ってところかな」

「うーんまあ、大まかに言っただけじゃあそうなるね」

なら話はわかりやすくていい。簡単な話だ、俺は死んだんだな。

だが、どこにでもいるようなしがない高校生が、特に理由もなく神様に会えるのだろうか。

俺は知らないが、彼女の口振りだと俺と会ったことがあるみたいだ

から、何かしらで生前に接触している可能性は高い。

俺の幼稚な脳では、連想できる出来事はひとつしかない。もしかしたらそれはただの願望なのかもしれない。

——異世界への転生。

的外れだったら非常に恥ずかしいことになる。黒歴史確定だ。それでも湧き上がる衝動を誰が抑えられようか。

「転生……できるのか？」

「ご名答。たしかにアースのある地域でそういう作品が流行った時期があったというのは知っているよ。最近は無駄だと聞いていたんだけどね」

今でも作品自体は多いけどな。新たな作品が生まれているわけだ。廃れてもなくなるわけではない。

だから書いている人が居れば読む人も居るのだろう。

「まあ正直、知っていても実際にこうなると驚きしかないけど」

「どうだろうね。でも、死を抵抗なく受け入れる事ができる人間はそこまで多くないよ」

受け入れるも何も死んでしまったのだ。その事実を変えられない。

無駄に抵抗するくらいだったらいつそ開き直ってしまったほうが建設的でもある。

「さて、その転生だけ……その前に、怒らないで聞いて欲しい」

どうせいつものパターンだろう。所謂テンプレってやつだな。

神を助けて死んだか、神のミスで死んだか。

「あんたらのせいで死んだのか？」

「……こうもすんなり進むとあれだね……正直、君の正気を疑うよ」

今更何を言っているんだか。

そもそも、正気だったらこんなふうに着いてはいられないと思うぞ、俺は。

こういう時って取り乱すのが普通なのか？

どちらにしろ、死んでる時点で正気なはずはないだろうに。

「死んだ人間が正気なものか。まあ、あんたらのせいで死んだのは分

かった。その埋め合わせ的なあれで転生させられる流れなのも」

「たしかにその通りなんだけど一つの選択肢として、ここで君の魂を輪廻の流れに戻すこともできる。ただ、その場合は本当に君は死ぬ事になるけどね」

そんなのどちらを選ぶかなんて決まっているじゃないか。

ここで完全な死を選ぶのは、余程人生が嫌なやつかただの馬鹿だろ。

それに、転生と言えば男子の夢、剣と魔法の世界と相場が決まっているものだ。

そんな世界に行けるチャンスを自ら手放すわけがない。

「流石にそれは意地が悪いんじゃないか？ 答えは分かりきっているんだろ？」

「それもお見通しだったかな」

「お見通しもなにもな。初めから一つしか選択肢は無いだろうに」

もし、本当に殺す気ならさっさと殺すか、一番初め……謝る前に選択肢をだすだろう。

そもそも神と人では格が違うのだから媚びへつらう必要がない。

寧ろ、こうやって対等な会話が成立しているのが怖いくらいだ。

「それもそうだね。さて、転生の話になるんだけど、うちの世界に送られてくる魂には僕からの贈り物、所謂転生特典が三つ送られるんだ」

「その三つはそちら側で選ぶのか？」

「いや、基本的には転生者が決めれるよ」

転生特典まで付いてくるだけではなくこちらで決めれるとは……太っ腹だな。

「といっても、強すぎるものは……ダメだったり、選ぶ数が減ったりするけどね」

まあ、能力の制限は当然か。飼犬に手を噛まれては馬鹿らしい。そもそも、こちらが特典を選ぶだけでもありがたいな。

「じゃあ……いや、俺はどんな世界に行くんだ？ 科学が発達した世界と魔法が発達した世界では随分変わってくるからな」

「そうだね。世界の名前はリンフィード。魔法が八、科学が二くらい



の割合で魔法が発達している世界かな。ああ、アースの読み物にでてくるような生物例えば龍や亜人とかもいるよ」

……ほんと、どこまでもテンプレだな。

「ふむ……」

能力を創る能力とか、考えた事象が現実になるとか、そういったチート能力も魅力的だが、あまりイージーモード過ぎても面白味に欠ける。

……不老不死とまではいかないが、死ぬことには耐性が欲しいか。

それと、どんな状況でも絶対に必要な能力……記憶力。

もう一つは、常人より才能に恵まれていればそれでいいか。

「二つ目は概念的攻撃……例えば呪いとかだな、これを無条件で無効化する能力。二つ目は自分の意思で取捨選択できる都合良い絶対記憶能力。三つ目は人よりも魔法の才能を高めに設定してくれ。つてくらいかな」

「結構自重するんだね。一般教養と能力の創造って言うと思ってたよ」

やっぱ、あれなのか、チート能力を頼む人もいるのか……。

いや、そんなほんぽん転生するものなのか？

「あんまり強すぎても面白くないし、変な制約つけられたくないからな」

「ふふ、それもそうだね。さ、特典も決まったし転生……しましょうか」

神が笑いながら指を鳴らす。

それを合図に俺の身体がふっ……と消え、そして少し遅れて意識も

……暗転……す——



少年を自らの世界へ送り出し、一人、この場所に残された彼女。

世界を跨ぐという事は疲れるのか、それともただ単に気が抜けたのか、目を閉じ軽くため息をついた。

「目が覚めたらもう喋れるようになってるよ。君の羞恥を思っていることではないけどね。……そっちのほうの色々と都合がいいのさ」

少年は既にもいないが、そこにいるかのように、誰もいない所に向けて語りかける「神」。

期待を込めてか、哀れみを思ってたか、はたまた別の感情なのか。新たな転生者へ向けた思いに、その口角は先程に比べ僅かに上がっていた。

「さあ、君のもうひとつの物語の始まりだ——」

壱世——いきなり十歳とはいかに

「……………」

目が覚めたら十歳の誕生日だ。

なぜすぐにわかるか？ 別に特別なことは何もない、ただ記憶を覗いただけだから。

俺の存在が特別といえば特別だが……そんなことはどうでもいいか。

二人分の記憶を持つって結構……来るものがあるな。

俺に似た人格っぽいから、性格は問題ないが知能レベルが……ほら。

そんなことより、なぜ貴族の家に生まれたのかあの貧乳に小一時間問いつめたい。

別に平民でいいじゃないですか。これは試練ですか？ いいえ、ケファイアです。

元々の記憶があるからいいけど、身体の方の記憶なかったら詰みだぞ。

記憶にもあるが一応部屋を見回してみる。

壁紙は白、床は赤い絨毯が敷いてある。いかにも貴族って感じの部屋だ。

絨毯も非常に高価なものが敷いてあるみたいだ。肌触りいいし。

俺が寝ていたベッド。まあこれは庶民的な高級品か。

シーツが他のモノに比べて安物っぽいのは幼さ故の過ちがあるからだろうか？

しかし掛布団は異常な程ふわふわしてて出たくない。この布団は人をダメにするな。

次に本棚。小学生（小学校には通ってないらしいが）らしく絵本とか置いてある。

中身はえーと？ 『正義の味方 カイバーマッ』粉砕★玉砕★大喝采!! っておい。

……他は、『永遠大陸』、『魔王物語物語物語』、『iB』などなど。

どっかで聞いたことあるけど気にしたら負けだ。

部屋の角にはおもちゃ箱が置いてあるな……。

中身は普通に積み木とか、オルゴールとかか。

そういえば、科学があまり発展していないとかなんとかだったがこの世界にゴムはないのか……あつたはゴムボール。

普通に、子供のおもちや箱だったな。つまらんな、魔法器具的なのかなんかないのか？

一応チェスは魔道具らしい。相手の駒を獲るときに動くとか、マスの名前を宣言すれば動いてくれる。

例えば「キングをAの五へ」といえばキングがAの五に移動するし、移動先に敵の駒があれば盤上から叩き出す。

なかなか面白いな。

最近は専らこのチェスがマイブームだったみたいだな。

汚い字で勝敗が書かれている紙がチェス盤と一緒に置いてあった。

……まあ、勝率は察してやれ。

さて、去年までの記憶から察するとだ、恐らく奴は扉の前で待機している筈。

それでクラツカーの様なクラツカーで此方を驚かし、こういうんだな「誕生日おめでとうございます」と。

パーン！

……ほら来た。

「シンラ様、お誕生日おめでとうございます」

ニコニコ顔の専属メイドのメイ。手に持っているものは赤い煙を上げているクラツカーの様な物。

現在十五歳の彼女はいろいろあってアルストリア家に勤めているのだが……。

こう、なんで紐付きクラツカー使うかな……。

一応主人に当たる俺が紐と紙まみれになったんだが。

「……ありがとう、メイ。ゴミ、片付けておいてね」

「むう、わかりました。あ、オリシユ様がお呼びでしたよ」

「ん、すぐ行く」

先程、クラツカーで俺を攻撃したこの少女は俺専属の召使いだ。世の男どもが愛してやまないメイドさんなのだ。しかしどうなのだろうか、この世界では貴族制度、奴隷制度まである。

メイドはやはり萌えの対象ではないのか？ それともセーラー服やナース服等と同じ扱いなのか？

とか考えているうちに父上の部屋の前まで来てしまっていた。

「シンラです」

ノックを三回し名前を言うと勢いよく扉が開く。

そういえばこの世界での俺の名前はシンラリアルストリアだ。そして地球の時の俺の名前は望月森羅だ。

名前が変わらなかったのは有難い心遣いだな。

「誕生日おめでとう！ 我が息子よ！」

そして宙に紙を浮かせた状態で突っ込んできた父、オリシユリアルストリア。

ジョリジョリすんな、髭痛いから。てかお前、髭剃れよ。

「痛いです父上。……メイド長に怒られるよ？」

「う、ごほん。でだ、シンラ改めて誕生日おめでとう」

「ありがとうございます。それで、なんで呼ばれたの？」

子供っぽい喋り方ってどうでいいのか？

正直昔のことなんて覚えてないから口調作って喋るが難しい。

「シレジアには十歳になると魔力検査する慣例があるのは……」

シレジア……この国の名前らしい。正式名称はシレジア王国だ。かなり簡素な名前だな。

その昔、ある勇者と7色の魔法使いが魔族との戦いに備え建国したという。

俺の生まれたこの家はその魔法使いのうちの白、光を司る由緒正しき名家だとか。

それより十歳なのか検査。

俺の記憶にある転生物の大概が五歳だぞ？

……まあ、流石に五歳児にレベルを合わせて生活するのも嫌だから

助かるといえば助かるが。

「……誕生日に検査するの？」

「そういう事だ……ん、念話が入った」

念話？ テレパシー的な何かか？

こめかみを押さえ少しの間、沈黙する。

「……………は？ 机？」

そう言うとう父上は乗り越えてきた机の方まで戻りなんかゴソゴソしでした。

そういえば父さんの形見の数珠は地球か……。母さんのネックレスも。

……………俺だけか。

「あつたあつた、まあ何で家に有るかはいいか」

机の引き出しから水晶を取り出した父上。

こつちを見るや怪訝そうな顔になった。

「……………なんで泣きそうな顔になってるんだ？」

——つ！

「貸してっ!!」

恥ずかしさのあまり持ってきた水晶をぶんどったはいいが……どうすればいいのかわからん。

魔力を流すとか？ ま、なんとなくいいか。

なんとなく、心臓の方から何かが流れるイメージで水晶を持つ手に意識を集中させる。

どうやらあっていたらしい。

水晶が銀色に光り、数字と文字が浮かび上がる。

数字は二千万、文字は……炎、水、雷、地、風、光、闇の七文字。

「おおー、流石、俺とセリアの子だなー！」

すまないが、アンタの子じゃないんだよ「俺」は。

「……………二千万」

後ろから覗いてたメイが固まってる。まあ、想像通りだが通常じゃありえん数字なのだろう。

神様さんはもしかしなくても「人より」の意味を間違えてるねこ

れ。

俺は普通の人よりは魔法的才能を高め望んだよ、ああ望んださ。これ……普通の人とかじゃなくて人間の域超えてませんか？

「……ねえメイ、これってすごいのか？」

……我ながら白々しい。

いや、でももしかしたら常人の平均が一千万だったり五百万だったりするかもしれない。

「凄い？ いやいや、え？ えーっと、私が今年測った時、約三千四百だったから……」

メイさん？ 敬語取れてますよー。

まあ、案の定一般人は魔力が少ない、と。

メイが少ないだけかもしれないが……もしそうだったとしてもここまでの差は無いだろう……。

やってくれましたな……神様やお……。

「メイが大体……そうだな、五千八百人位か……凄いぞシンラ！ ただ、王にどう報告しようか……」

メイが十五歳で三千四百か……対する俺は十歳で二千万。並べるところなる。

3400

20000000

いやあ、ぶっ飛んでんな。文字通り桁違いじゃねえか。しかも浮かんだ文字は属性だろ？

七文字って事は七属性か。どういう振りされてるのか知らんがかなり異常だな。

俺が研究機関だったら飛んでくね。おー怖い怖い。

って考えると貴族生まれっていいな、でっけえ後ろ盾があるじゃないね。

「ま、別に報告はしなくていいか。シンラ、これから魔法のお勉強しなさい」

王への報告はありのまま話せばいいと思うんだが……。

こんな威厳の欠片もない父上でも腐っても始まりの七貴族。

王に次ぐ発言権があると思うのだが……いや、有るが故に知れてはいけないのか？

自分に次ぐ発言権を持つ者が自分以上の力を手に入れたら……本当に信用しているものじゃなければ、俺だったら消すしな。

となると、外出は控えたほうが良さそうか？

「シンラ様が楽しみにしていた魔法の勉強ですよ？ 私も一緒に勉強しますよ？」

少々考え事に耽っていたらしい、渋っていると取ったのかメイが後押ししてきた。

「メイも一緒なら勉強するか……。父上、それでは」

用が終わったのでさっさと退室した。のだが、ガタツと物音がして後ろを振り返った。

目に飛び込んできたのはorzの体制になっている父上。

……貴族の威厳なんてあったもんじゃないぞ、それ。

「くう……メイ、あとは頼んだぞ。何かあったら、すぐにメイド長を呼べ……私はまだ仕事が残って……」

「わ、わかりましたオリシユ様。では行きましようか、今日は簡単に魔力というものを……」

過保護になる気持ちもわからなくはないが、メイが引いてるぞ……。

シンラの記憶から読み取るといつもこうらしいのだが……いや、本当に貴族の威厳ってなんだろうね。

公私の区別はついているのだろうが、これを見ると他所でもこんな感じとしか思えんぞ……。

◇

——訓練所。

先程居た父上の部屋から数分歩いて外にでた所に建っている建物。そこに俺とメイは居た。

外観は……体育館だな、うん。学校とかにある体育館。



鉄でできた横開きのドアを開け、中に入る。

室内の床はフローリング……ではなく土でできていた。

恐らく、地属性の魔法を使うためだろう。

どういふ魔法があるかは知らないが、水晶に地の文字が書いてあったし地属性の魔法があるのは確定的に明らかだろう。

壁には木で出来た人型の模型が立てかけてある、的だろうか……。  
プラ板でできた人型じゃいかんのかね。どうせ射撃用なんだし。  
いや、鉛弾じゃなくて魔法だけでも。

まあプラスチック加工ができないだけなのだろうけど。

ぱっと見た所、仕切られてはいないので中を全部見渡せる。

どうやら、俺とメイ以外の人間はいないようだ。

ステージは無いが倉庫があるので、その中まではわからないのだけれども。

メイが突然歩き出したかと思ったら、立てかけてある的の一つへと右手を向け、こちらへと振り返る。

「シンラ様、先ずはお手本として一度見せますね。フレアアロー!!」

メイの突き出した右手からは火で出来た矢が現れ、一直線に飛んでいく。

その矢は、的の腹へと吸い込まれていき、直撃。霧散した。

直撃した部分が焦げていたが、それもほんの数秒で消えた。

「これが一、二番目に簡単な魔法です」

手から魔力を型どり放つ、ただそれだけの簡単な魔法。

本当にただそれだけなのだとしたら一番簡単はずなのだが……

一位二位を争うレベルの魔法がもう一つ有るみたいだ。

有るのであれば見せていただきたい。

「もう一個のほうは?」

「ボールです、いきますね。フレアボール」

もう一度右手を模型に向ける。今度は矢ではなく球が飛んでいき、同様に霧散した。

結局、型どった魔力を放つだけのようだ。……期待して損した。

初めて魔法というものに触れて感じたこと……ただただ地味だな、うん。

だがまあ、どのような魔法であれ魔法は魔法。

所詮飛び道具なんてスリングショット程度の物しか触ってこなかった人生だ、楽しみじゃないと言えば嘘になる。

「地味……ま、いいか。どうやるのか教えて」

「私の場合ですけど、右手に魔力を集めて、手からニュッと形作りながら飛ばす感じですかね」

そんな抽象的なイメージでいいのか魔法さんよお……。

まあ、そのイメージでとりあえずやってみるか……丸い餅からちぎれて飛んでくイメージ……。

「こうかな。フレアボール……お、でた……消えた」

普通に出た。いや、やばくない？

よくよく考えてみたら木の表面を焦がす程度の威力だとはいえ、こんな凶器を小学生に持たせても良いのだろうか。

まあ、大貴族だから其の辺は大丈夫か……？

いや、大丈夫じゃないからこうやって仕込まれるのか、自(己解)決したは。

「……次は別の属性でやってみましょうか」

そういえば移動中にメイに教えて貰ったのだが……

炎、水、雷、地、風、闇、光は基本属性とされ、人々はこの中から多くても3つの因子を持つらしい。

更に、極々稀に希少属性を持つて産まれてくる事もあるとかないか。

実際に現れた希少属性では、血とか時とかが有名らしい。

ただ、さつき俺が魔力測定で使った一般的な測定器では基本の七属性しか測れないらしい。

魔力量は十歳児の(俺除く)最高が十万ちよつと、人類最高が約六千万だそうだ。

ちなみに水晶が放った光で素の質がわかるらしい、俺の「銀」は恐らく人類最高。

で、この『質』は同じ魔法を全く同じ魔力量で放った場合の優劣の原因になるのだとか。

俗に魔力を練ると呼ばれる行為はこの『質』を上げる行為らしい。あ、メイの十歳時の魔力は千六百五十だって。五年で大体二倍に増えるらしいね。

俺の中三の魔力量は大体四億になるのか……規格外にも程があるだろ……。

閑話休題、アローやボールの前にフレアと付けたから炎属性の矢が出たらしい。

この接頭語を変えるだけで初歩中の初歩のこの魔法は属性が変わるらしい。

その接頭語は、水はアクア、雷はサンダー、土はアース、風はエアロ、光はライト、闇はダークらしい。

らしい続きになるのは今現在進行形で聞いているだけで、自分で見たわけではないから確証が持てないからだ。

言うより早いかな、また、魔力の塊から餅をちぎるように放つイメージで詠唱——というほど大それた物でもないが——をする。

「アクアアロー！」

手から放たれた水でできた矢は的を居抜き、その場を濡らした。

うん、とりあえず無問題。

「流石シンラ様、次は雷属性で——」

他の属性も試してみたが、基本的に全部魔力だからあれだな、見た感じダメージは変わらない。

フレアアローもフレアボールもぶつかった所が少々焦げ付くくらいだし、アクア系はどっちも湿っただけ、それ以外は見た感じあんま差がわからなかった。

……地属性のボールは物理的に痛そうだけど。

だって拳大の岩だぜ？

暫く魔法を出して遊んでいるとメイに止められた。

「シンラ様、そろそろ昼食の時間です」

「戻る？」

「そうなされたほうがよろしいかと」  
「はい」

## 式世——光に拾われた闇の子

人の寄らない森の中。——その奥深くに私は居た。  
パパもママも私を愛していた。

私もパパもママも大好きで、毎日が幸せだった。  
それに間違いはない。

でも、突き付けられた現実是非常だった。

大人の事情が全く分からない程子供じやないつもりだ。

それでも……予想していない事態に私は目を背けたかった。

それは誕生日、十月十七日の事。

いつものように朝食を食べて、いつものように兄あにさま様に勉強を教わっていたあの時、いつもとは違い、パパに連れられて書斎しよさいへと向かいました。

そう、十歳の誕生日を迎えた私の魔力検査を行うために。

パパに渡された水晶はとても綺麗で、しかし、私に突きつけた現実  
は残酷な物でした。

全くなんの反応も示さずに、ただただ時間だけが過ぎていく。

時間が経つにつれてパパの顔も険しくなっていきました。

そして悟りました。

ああ、私には魔力がないんだな、って。

「なんで、私なんだろう」

何故、私には魔力がないのでしょうか。

兄あにさま様は所謂いわゆる天才と呼ばれる程の才に恵まれているというのに。

兄あにさま様ができる分、私はできないと言うのでしょうか。

大いなる運命神はそう決めてしまったのでしょうか。

どうせ兄あにさま様にも会えない。パパもママも、私をゴミを見る様な目で

……そこに愛なんて存在しない。

必要とされない世界にいても自分が傷つくだけ……

だっただらいつそ——

死ねば楽になれるのかな？

「グルルルル……」

覚悟を決めるのを待っていたかのようなタイミングで犬型の魔物が現れ、それと目が合った。

その目は赤く、とても正気には見えない。

仮に普通の犬だったとしても、野に生きる者に会話など通じることもない。

——息が止まる。

死ぬ覚悟は出来ているとはいえ、怖いものはやはり怖いです。

数秒間沈黙が場を支配する。

私が抵抗しないと分かったのか、ゆつくりと地を蹴り、こちらへと向かってきた。

残された時間、最期の懺悔ざんげでもしましょうか。

もしもゆるされるのなら、魔力を持たずに生まれてきた事を……

……

……おかしい。

既に十数秒はたっているはず。

野生の動物が獲物を前にして去るなんてことがあるはずありませんし、かと言っていくらゆつくり歩いていてももう噛み付かれていてもおかしくありません。

むしろ噛まれていないとおかしいくらいの時間が経っています。

恐る恐る目を開けると目の前にいたのは犬型の魔物——ではなく、顔に血を付けて笑っている女性の方が立っていました。

「大丈夫かいお嬢さん？」

「……まあ、はい」

「ははは……立てる？」「ここは危険だからとりあえず出よう」

私が無事なのを確認すると、素っ気ない態度に苦笑をしつつも優しく私を立たせてくれました。

でも、この人も私が魔力を持たない落ちこぼれだと知ると侮蔑の眼差しを向けるのでしょうかね。

そうなったら殺してくれと、頼んでみてもいいかもしれません。  
……流石に人殺しは渋りますかね？

その時はまたこの森に餌になりに来るとしましょう。

「疲れたら言っただけ？」

「わかりました」

三十分程直進し続けると森から抜け、昨日まで慣れ親しんだ、美しい街並みがそこには広がっていました。

正確には私の家……いや、元私の家の領土ではないけど。

それでもシレジアの街並みは……美しい。

「着いたよ……まあ、その様子じゃあ言わなくてもどこかはわかるみたいだけど」

振り向き、私の顔を凝視する女性。

なにか付いているのでしょうか？

「僕の予想が当たって見れば見過ごせないかな。単刀直入にきくよ、捨てられたのかい？」

私の頬に触れ、悲しげな表情を見せる女性。その指先は少し湿っていました。

つまり、私は泣いている？

「許せないよね……自分の腹痛めて産んだ子を、罪のない少女を、自分の勝手な理由で……」

沈黙を肯定ととったのか、まさに自分勝手に怒り出しました。

けど、事情を知らないのに上面<sup>うわつら</sup>だけで同情<sup>しやぐ</sup>されるのも癪<sup>しゃく</sup>に感じます。

けれどこれは、死ぬるいい機会かもしれませんね。

「魔力が無かったから……仕方ないんです。これも運命ですから。

……だからこれでいいんですよ」

「仕方なくなんてない！ 君は知らないだけなんだ、家族の温もりを……人の愛を！」

「私が愛を知らない？ なんてそんなことが初対面のあなたに分かるんですか！」

「——っ！」

いけない、つい声を荒らげてしまいました。

いえ、貴族のプライドなんて今やちっぽけなただの意地……もはや  
どうでもいいですね。

それでも、今までのパパやママ、兄様あにさまからの愛を全否定されるのは  
どうしても我慢ができません。

「いくら子供の私でも、貴族の誇り位は理解できますよ。……世間か  
ら魔盲がどれだけ蔑まれるのかも。だからこれでよかったんです。  
私が死ねば、家も私も——」

「だから死ぬの？ もう無理だつて諦めるの？ そんなの絶対おかし  
いよ！ 生きていけば、必ずいい事がある。だから、死ぬなんてそん  
なこと簡単に言わないで……」

自らの倫理観を押し付けるのは大概にして欲しいものですね。

こんなのに拾われるくらいならここで自殺を——

「煩いから見に来てみたら……いい年してガキ虐めてんじゃねえよ」

「……シンラ君」

煩い戯言を右から左へ受け流しながら、視界の隅で手頃な石を探し  
ていると銀髪の少年が街の方から現れました。

女性の反応から考えると知り合いでしょうか、もしそうなら連れ  
帰って欲しいものですね。

死ぬならひっそりと死にたいですから。

「僕はこの子を正さないといけないんだ、間違ってる人を正しい道に  
導くのが勇者の役割なんだよー」

「どうだろうな、勇者なんてただの傀儡でしかないさ。そんなことよ  
り、あんた名前は？」

急に出てきたと思ったら図々しく名を名乗れと言いますか……

まあすぐに意味もなくなるし、名乗っても損は無いですよね。

「……アリス」

「闇の所の娘か……俺はシンラ、お前を殺す者の名だ」

「——っ」

息が……出来ない！

「苦しいか？ 吸っても吐いても酸素がないからな、息なんてでき



ねえよ」

やっと死ぬる、これで良かった？

「シンラ君！　っ君を人殺しにはしたくないんだ！」

私が望んだことなのにどうして——

「アリスちゃんだって泣いてるじゃないか！」

——私は泣いているんでしょうか……？

「不思議そうだな」

うるさくない方……シンラ？　が語りかけてきましたが、私には言葉返す事ができませんでした。

いくら、問いかけようとしても息が漏れるだけで声がでることはなかったので、諦めて口を噤つぶむしかない。

「声が出ないことが不思議か？　それとも、泣いている事が不思議なのか？」

声が出ないこともそうですが、泣いていることの方が私には不思議で堪りません。

とうの昔に涙など枯れてしまったと思っていたのに。……今日は泣いてばかりですね。

「簡単なことだろ、そんな事」

分からない。

捨てられ、世間からも後ろ指を指される将来が確定したのに、今更死が近づいてきただけで泣くなんて。

魔物の時は泣いていなかったと言うのに……本当に不思議で仕方ありません。

「その馬鹿に感化されて死にたくなかったんじゃねえの？」

心境を当てられ心臓が、明らかに早く動く。

息ができないのも大きな理由の一つですが……本当の理由は、生への渴望。

散々殺して欲しいだのなんだのと宣ったくせに、何を言うかと私自身も驚いています。

ですがなるほど、確かに生きていればまた兄あにさま様にも会える。  
嫌われていなかったとしても、……嫌われていたとしても。

兄様あにさまに会うためにも私はまだ死にたくない！

「だったら、なにか行動してみろよ。その二本の足で、立って歩け！」  
「う……あ……あああああ!!!」

私の中で音がなった気がした。

そして、水門が開くかのように魔力が、私が捨てられた原因になった魔力が、ゆつくりと流れ出す。

「アリスちゃん!? クツ 凄い魔力…近づけない!!」

やがて私の魔力は突然の解放で体から溢れ出し……シンラ君の魔力を打ち消してしまいました。

その様子をシンラ君は笑ってみていました……何がおかしいのでしょうか……?



「魔力が無かったから……仕方ないんです。これも運命ですから。……だからこれでいいんですよ」

「仕方なくなんてない！ 君は知らないだけなんだ、家族の温もりを……人の愛を！」

門の近くで口論している少女たち……家族愛を説いている方は最近召喚された勇者クアル。

もう片方は……恐らく先日死亡報告があった、闇の七大貴族の次女アリスだろうか。

俺の予想が当たっていれば、大方魔力が無くて捨てられたとかだと思おう。

流石に誕生日を迎えた直後に重病にかかり死亡は都合が良すぎるし、家が大きくなればなるほど魔盲はさつきと処分しないと付け入られる隙になる。

勿論魔盲は貫い手がかからないから政略結婚にも使えないしな。

そんな相手に家族愛を説くなんて悪手以外の何物でもないと思うんだが……

「私が愛を知らない？ なんてそんなことが初対面のあなたに分かる

んですか！」

「——っ！」

ほら言わんこっちゃない。叫んだアリス自体、目を見開いて驚いている。

……大声を出すタイプの人間じゃないだろうに、そこまで嫌だったのか？

大体初対面で深くまで踏み込みすぎなんだよあいつ。曰く、「勇者たる物、常に正道を行け」だそうだ。馬鹿でしかない。

所詮は魔物を……人類の敵を滅ぼすための兵器でしかないのに。

「いくら子供の私でも、貴族の誇り位は理解できますよ。……世間から魔盲がどれだけ蔑まれるのかも。だからこれでよかったんです。私が死ねば、家も私も——」

「だから死ぬの？ もう無理だって諦めるの？ そんなの絶対おかしいよ！ 生きていけば、必ずいい事がある。だから、死ぬなんてそんなこと簡単に言わないで……」

埒が明かないな……そろそろ出るか。

もし、アリスがこの世界の主人公だとしたら……このチャンスを生かす以外無いし、違うなら違うでその時は肥料にはなるだろ。

自己中心的？ 元々死んでいたはずの人間を救う方が俺は自己中心的考えだろ。少なくともダークネス家にとって、アリスの存在は抹消したいのだから。

いやまて、なんて出ていこうか……ちよいと高圧気味で行くか。

「煩いから見に来てみたら……いい年してガキ虐めてんじやねえよ」俯いていた顔がこちらを捉える。

若干痩けてはいるが、十分な愛らしさを持つ少女。

俺がロリコンだったらコロツと落ちてたな。ロリコンじゃないから特にどうということではないが。

「シンラ君……僕はこの子を正さないといけないんだ、間違ってる人を正しい道に導くのが勇者の役割なんだよー」

クアルにとっての正解ははたして、アリスにとっての正解なのだろうか。

大体、魔王を倒すために呼ばれただけのくせに……まあ、いまはいか。

「どうだろうな、勇者なんてただの傀儡でしかないさ。そんなことよ  
り、あんた名前は？」

ボソツと、名残惜しそうに名乗るアリス。

いや、本当にアリスでよかった。これで違った自殺級の黒歴史だったぜ。

「闇の所の娘か……俺はシンラ、お前を殺す者の名だ」

魔法を発動しアリスの周りの酸素を薄くしておく。

突然だが、この世界に存在する全ての人間は魔力を持っているという  
ことは常識として知っているだろうか。

テンプレすぎて笑えてくる話だが、母胎に対して強力な魔力を持つ  
胎児は母胎を守るために自己封印をするそうさ。

本来は生まれてくる時に封印は解除される。だが、その時に封印が  
解かれなかった子も少なからず存在する。

それが俗に言う魔盲つてやつだ。……まあ、魔力を持っていても非  
常に少ない場合も魔盲とされる場合があるからこれが全てでは無い  
が。十中八九、七大貴族は古の血族だから後者は有り得ない。

それに、人為的に封印を解く方法は無くはない。まあ、一番手っ取  
り早いのが生存本能による覚醒である。

じわじわと死が近づいてくれば、生存本能で封印が解けるだろうと  
いう算段だ。

下手に首絞めたりとかしたらクアルにぶった斬られるしな。

こちらをじつと見つめる目は確かな動揺を現していた。

「苦しいか？ 吸っても吐いても酸素がないからな、息なんてでき  
ねえよ」

「シンラ君！ 君を人殺しにはしたくないんだ！ アリスちゃんだつ  
て泣いてるじゃないか！」

任せとけ。

そうアイサインを送ると渋々といった様子で下がるクアル。

本気で殺すつもりならとつくにやってるっつうの。

顔に手を当てて泣いているのか確認するアリス。

「不思議そうだな」

きよとんとしているその姿は抱きしめたくなくなるが我慢だ。

「声が出ないことが不思議か？ それとも、泣いていることが不思議なのか？」

本気で何で泣いているのか分かっていないようだ。

理解していなくても、心の底では生きていたいと、そう感じているはずだ。それが本能なのだから。

「簡単なことだろ、そんな事」

もうひと押しか？ 本能だけじゃだめなら、頭で理解させればいい。

「その馬鹿に感化されて死にたくなかったんじゃねえの？」

目を見開き驚く。やはり抱きしめたくなくなる……なんていうか抱き枕にしたいというか……俺は変態じゃないぞ？

よし、あんま恥ずかしいこと言いたくないから気を紛らわすためにふざけて見たが、あまり効果がないな。

「だったら、なにか行動してみろよ。その二本の足で、立って歩け！」

「う……あ……あああああ!!!」

やはり主人公だったか。

アリスを中心に魔力の奔流が起きる。

その魔力に流されて俺の魔法は打ち消されたが、これでいい。

「アリスちゃん!? クツ 凄い魔力……近づけない!!」

予想通りの結末に思わず笑みが溢れてしまう。

「魔力、あるんじゃねえか」

「これで……兄様に……あえる」

糸が切れた様に倒れる彼女を受け止めた。

慣れない魔力の使用、それも暴走のせいか気を失ってしまったが、直に目を覚ますだろう。

「シンラ君のこと……誤解してたかもしれないね」

「いや？ もしも彼女が本当に魔盲だったらあのまま殺してたけど」

「嘘。本当に魔盲だったらこんな事してなかったくせに」

たしかに平民の少女だったらこんなことしないで家に戻っていた。  
それは認めよう。

何故バレたし。

「ま、まあそんなことはどうでもいいだろう？ それよりアリスをどっか連れてつてくれないか？　うちは流石にまずい」

「たしかにどうでもいいか、今は一人の少女が救われたことが重要だね。わかった、マスターに話してみる」

「ギルドか……まあ、あそこならアリスも生活していけるか」